

家庭科

総合的な学習の時間および道徳と効果的な関連をはかった 中学校技術・家庭科（家庭分野）の題材開発

—地域の高齢の方との交流学习—

藤井志保

1. はじめに

中学校技術・家庭科家庭分野の過去20数年の大まかな歴史をふり返ってみると、女子必修の時代から、男女共修へと変革し、男女共同参画社会という背景と共に、内容も充実する方向で進んでいくように思われた。しかし、その後学習指導要領の改訂とともに、授業時間数が減少し、授業時間だけでは実践的・体験的な学習、問題解決的な学習を効果的に展開することが難しく、子どもたちに十分な生活実践力を育むことができていないという課題に直面している。

家庭科教育の使命は、主役である子どもたちが生き生きと学べる魅力的な授業を創り、子どもたちの生活実践力を豊かに育んでいくことである。その目的達成のためには、家庭科の時間数増が必要であると考え、同時に現在のカリキュラムの中で、どのような題材を開発し充実させていかかも、より求められている。

つまり、学校教育の中で家庭科教育が果たす役割を明確にし、中学校3年間の成長発達に応じて、各学年に柱となる教育内容を置きストーリー性をもたせ、子どもたちの主体的な活動を重視した授業を創っていくべきだと考える。

筆者は家庭科の時間に、7年生で「地域の高齢の方との交流会」、8年生で「幼児とのふれあい体験学習」、9年生では「甚平の製作」を位置づけ、3本の柱として取り組み、総合的な学習の時間や道徳と関連させることによって学習内容の充実を図るカリキュラムを開発中である。

いずれも『生きる力』を育むことを大きな目標

とし「人と人のかかわり」や「自分をみつめること」を学習の重点事項としている。特に、中学校7年生の内容については、総合的な学習の時間、道徳、国語など他教科とも関連をはかり、家庭や地域の協力も得て、学校行事としても位置づけて取り組んでいる。

本稿では、まず「総合的な学習の時間」や「道徳」と「家庭科」とを関連させる意義、指導計画のありかたについて述べ、本校での実践例を検証していくこととする。

2. 学習指導要領の改訂と家庭科と総合的な学習の時間との関連について

総合的な学習の時間の内容に関して、今回の学習指導要領の改訂では、次の5点が目標とされた。①横断的、総合的な学習や探求的な学習②自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を形成すること③学び方やものの考え方を身につける④問題解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること⑤自己の生き方を考えることである。特に「探求的な学習」「協同的に取り組む」という点が重視されている。

「探求的な学習」「協同的に取り組む」は、技術・家庭科の学習がこれまでもめざしてきた体験的・問題解決的な学習や他者と豊かにかかわる体験を重視してきた点と通じるものがある。

具体的には、家庭科の今回の改訂において『豊かな心の育成』のため「幼児とのふれあいとかかわり方の工夫」「高齢者などの地域の人々とかかわ

り」が全ての生徒が履修する内容になった点である。つまり、総合的な学習の時間と家庭科のめざすものが「探求的・協同的な学び方」「人と人とのかかわり」という点において一致しており、関連させることの意義を見出せるものである。

筆者は今までも「幼児や地域の高齢の方とのふれあい」を学習内容の柱として取り組んでおり、この内容をより発展させていく必要性を感じている。

そこで今こそ、総合的な学習の時間と関連をもたせて、家庭科の内容を発展させ、学んだ知識や技能をテーマ解決の手段として用いて、他者と協同的に取り組みながら活用することで、より効果的に自分の実生活に生きてはたらく力に高めることができると考えている。

3. 学習指導要領の改訂と家庭科と道徳の時間との関連について

道徳は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであるが、技術・家庭科における道徳教育の指導においては、学習活動や学習態度への配慮、教師の態度や行動による感化とともに、技術・家庭科の目標との関連を明確にしながら適切な指導を行う必要があるとされている。

家庭科では、望ましい生活習慣や勤労の尊さや意義の理解、家族や高齢の方への敬愛の念を深めたり、家庭や地域社会の一員としての自覚を持つこと、そして何より「自分の生き方」を考えることなど道徳についても適切な指導を行うことができる²⁾。

筆者は、「幼児とのふれあい体験学習」についてのまとめとして、自分の成長を見つめ、家族をはじめこれまで多くの人々に支えられて今の自分がいることに気付かせ、これからの「生き方」を考えさせている。

また後述の実践例では、地域の方との交流会の取り組みと関連させた内容として、道徳の時間に高齢の方からの手紙を取り上げた。それを読む事を通じて、高齢の方の気持ちや心情を感じるとと

もに、相手の喜びが自分の喜びにもつながるような交流会にするために、自分たちは何をしていけばいいのかを考えさせた。

4. 指導計画の作成にあたって

家庭科の新学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、配慮する事項として次の3点があげられている。

- ・実践的、体験的な活動を重視する
- ・問題解決的な学習を充実する
- ・家庭や地域社会との連携を図る

つまり、自己を見つめ生活の自立をはかり、家庭の機能を理解してこれからの生活を展望して課題をもって主体的によりより生活を工夫できる能力と態度の育成を重視すること、人とよりよくかかわる学習活動などが示されている。さらに、時間軸と空間軸の視点やストーリー性をもった年間指導計画を作成することが求められている。しかし、授業時数は削減されたままで、すべての内容を履修しさらに内容を充実させるためには、限られた授業時数での指導の工夫が、家庭科における大きな課題の一つである。

また総合的な学習の時間においても、参考例として新たに次の4つの課題が例示されている。

- ・国際理解、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題
- ・生徒の興味関心に基づく課題
- ・地域や学校の特色に応じた課題
- ・職業や自己の将来にかかわる課題

これらは、日常生活や食をめぐる問題、地域の伝統文化やその継承など家庭科とかがわりの深い内容があげられている³⁾。

子どもたちの学びをより深化させるためには、総合的な学習の時間と関連をはかり、互いに補い合い、支え合う関係もしくは、家庭科を発展させた総合的な学習の時間の設定など、有機的な関連をはかった指導計画が今こそ求められている。

5. 本研究のめざすもの

「地域の高齢の方との交流会」の取り組みは本年度で7年目になる。当初は家庭科の時間だけの取り組みであった。しかし、それだけでは自ら課題を見つけ、問題解決したり、主体的、創造的に取り組みを深めることができない。また、人と人との豊かなかかわりや、コミュニケーション能力の育成や高齢者理解など、この学習を通じて育みたい力を十分につけることができないと感じていた。このように「地域の高齢の方との交流会」には、家庭科という教科の目標を超え学ぶべき要素がたくさんあった。そこで家庭科で身につけた知識や技能などを生かし、総合的な学習の時間および道徳と関連させ、探求的・創造的・協同的に取り組むことで、子どもたちの「生きる力」を、より育むことができると考えた。

本稿では、「地域の高齢の方との交流会」について、家庭科と総合的な学習の時間および道徳の時間など他教科との関連をはかることでどのような相乗効果が得られつつあるか、その題材開発の試みについて報告し、それに取り組んだ子どもたちの変容を述べる。

6. 授業の実際

次に家庭科と総合的な学習の時間および道徳の時間をどのように関連付けて取り組んだかその内容を表1に示し、その中から実践例を紹介する。

(1) 総合的な学習の時間の取り組み

「地域の高齢の方との交流会に向けて」

○ 単元設定の背景

現代の情報化、少子高齢化などの急激な社会変動は、我々の生活にも大きな影響を与えた。人とのかかわりが希薄になり、子ども同士は勿論のこと、高齢の方とふれあう機会も減少した。地域社会には乳児から高齢の方まで様々な世代・生活状況の人がおり、我々は自分との違いを受け入れ、相手の立場に立ち、共に支えあう社会を作ってい

かなければならない。本単元は、家庭科との総合単元で、地域の高齢の方をお招きし食事を作ってもてなし、交流を深めるものである。献立作成は家庭科で行い、本単元を通じて高齢の方「人生の先輩」とのコミュニケーションのありかたについて学ぶ。これからの社会を生きる子どもたちには、他者の立場に立ち思いやりをもってそれを行動化していく力がますます必要となる。家庭科の「食」の学習にとどまらず、この交流会を人生の先輩と積極的に語りこれからの生き方につながることを学ぶ機会とするために、この単元を設定した。

表1 家庭科と総合的な学習の時間（道徳）を関連させたおもな学習の流れ（中学校7年生）

家庭科	総合的な学習の時間（道徳）
<ul style="list-style-type: none"> ●中学校家庭科のガイダンス ●自分の成長と家族 家庭生活とのかかわり ●食生活と自立 ・食事の役割 ・健康によい食習慣 ・栄養素の種類とはたらき ・中学生の栄養と特徴 ・食品の栄養的特質 ・一日に必要な食品と概量 	<ul style="list-style-type: none"> ●総合を何を、なぜ、どのように学ぶか ●平和公園へ行こう ・さまざまな思考方法 ・問題解決のステップを学ぼう ・問題解決のステップを実践しよう ・「平和」について考えよう
<ul style="list-style-type: none"> ●地域の方との交流会に向けて ・献立の立て方 ・食品の選択 ・基礎的な日常食の調理 	<ul style="list-style-type: none"> ●私たちの未来予想図 ・文化祭で未来予想図を表現しよう ・企画立案の方法を学ぶ ・生活の中に問題解決の方法を取り入れよう ・自分たちが企画書を作り 交流し評価しよう
<ul style="list-style-type: none"> 調理実習（スパゲッティ）（和食） 【生活の課題と実践】 ～冬休みの課題 交流会の料理づくり ・食品、調理器具の管理 ・地域の食材 調理実習 試し作りで改善していこう ・献立の改善点を見つけよう 	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の方との交流会に向けて ・どんな交流会にしたいか 「問い」を考える ★さわやかなあいさつ（道徳） ・お客様とのコミュニケーション ・招待状ウエルカムボードの作成 ★お年寄りからの手紙（道徳） 寄せ集めのぜんざい ・お客様への電話
<ul style="list-style-type: none"> ●地域の高齢の方との交流会 ・交流会のふりかえり ・よりよい食生活をめざして 【生活の課題と実践】 ～春休みの課題 Befre After～ 	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の方との交流会での学びの発信と交流 ・ポスターセッションとは 地域の方との交流会で学んだことの発表会
●1年間の学習のまとめ	●1年間の学習のまとめ

□ 家庭科と総合的な学習の時間で関連している部分

○ 生徒観

子どもたちは、これまでの総合的な学習の時間にさまざまな思考方法やコミュニケーションの学習をし、「平和」をテーマに話し合い活動を行ってきた。平和文化センター理事長のお話を聞き、自己コントロールしながら相手の立場になって考える力が必要であることも学んだ。

小学校の時も、平和公園で海外の方に突撃インタビューを行い、英語で話しかけた経験を持つ。また、年下との交流も日常的に行っていた。このように、異年齢異文化を持つ人との交流や、相手の立場に立ってコミュニケーションする機会は小学校時代から多く経験している。

また、問題解決のステップを学び、問題を解決するためにはその「問い」があることを知り、道筋にそって物事を解決する思考方法にチャレンジしている。このたびは「お客様に来てよかったと思ってもらえる会にするためにはどうしたらよいか」という「問い」を立てて学習をスタートさせた。集団としては、仲間と協力して物事に意欲的に取り組めるので、高齢の方の気持ちを理解し、「人生の先輩」として敬意を払い、「他者への思いやり」をより行動化する力を高めていきたい。

○ 指導観

指導にあたっては、他教科と総合単元であるという特徴を生かし効果的な学習にするために次の3点に留意した。

①お客様が祖父母の年齢にあたることから「おじいちゃんおばあちゃんとの話題」という家庭での課題に取り組み、高齢者理解を深め、人生の先輩として敬意をはらうことができるようする。②本番を想定してのシミュレーション活動を取り入れ、仲間と共に工夫し実践しコミュニケーションスキルを高める。③教室での学びを生活と結びつけるために、家庭科、国語そして複数の教師がかかわり、通信などで保護者の協力も得て、多面的に指導していく。また、お互いを受容的に受け入れる集団であってこそ自己肯定感も高まり自信を持ってお客様に接することができるので、日々の人とのかかわり方やコミュニケーションのあり方

についても考えさせていく。

実践例Ⅰ 交流会成功のための問いを考える

昨年度の交流会の様子を写真で紹介し、この会を行う時にどんなものが必要か「形あるもの」と「形のないもの」に分けて考えさせた。



図1 昨年度の交流会本番 見送りの場面

子どもたちは、形のあるものとして、料理、花、テーブルセンター、会場の飾りつけ、招待状などをあげ、形のないものとして、あいさつ、笑顔、話すこと、感謝の気持ち、気配りなどをあげた。2つに分けて考えさせたことで、料理を作ることだけでなく、お客様へのおもてなしの心が大切なことを意見として出し合うことができた。

この場面では、すでに学んだ表2の問題解決の思考の6つのプロセス⁹⁾を思い起こさせながら「交流会が成功したと言えるものさしは何か」を先に考えさせ、そこから「問い」を導いた。

表2 問題解決の思考の6つのプロセス

- ① 何が問題かを考える。
- ② 重要問題を選んで「問い」を立てる。
- ③ 解決アイデアを発想する。
- ④ 解決アイデアを評価する「ものさし」をつくる。
- ⑤ 「ものさし」を使って解決アイデアを評価する。
- ⑥ 実行計画を立てる。

この思考方法は、総合的な学習の時間のはじめに学び、色々な場面で「問いは何だろう」「解決アイデアをブレインストーミングしよう」というように活用してきた。交流会について、生徒が考えた主な「問い」は次の表3の通りである。

表3 交流会を成功させるための「問い」

全体的なこと	
<ul style="list-style-type: none"> ・ どのような目標を持つ必要があるか ・ この会を絶対成功させるために何をすればいいか ・ お客様がまた来たいと思われる会にするには ・ お客様に喜んでいただくためにはどうしたらよいか ・ 自分達もお客様も楽しむ交流会にするには ・ お客様に「ありがとう」と本気で言ってもらい、笑顔喜んでもらえるには 	
コミュニケーションやマナー お客様との接し方	
<ul style="list-style-type: none"> ・ お客様にどんな話をしたらよいか ・ 笑顔があふれる会にするにはどうしたらよいか ・ マナーを守るためにはどうしたらよいか ・ どんな気配りや接し方が必要か 	
協力	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 一生懸命取り組みけんかゼロで楽しく進めるには ・ 班全員が担当をやりきるにはどうしたらよいか ・ 準備から片付けまで協力するにはどうしたらよいか ・ どうしたら自分の実力を精一杯発揮できるか 	
料理のこと	
<ul style="list-style-type: none"> ・ おいしい料理を手際よく作るにはどうしたらよいか ・ きれいな盛り付け方とはどんなものなのか ・ 高齢者の方が好む料理を作るにはどうしたらよいか 	
招待状や会場の準備など	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 雰囲気をよくする部屋の飾りはどうしたらよいか ・ 手紙を上手に書くにはどうしたらよいか ・ お客様に来てもらうにはどのような招待状がいいか ・ 感じのいいテーブルとはどんなテーブルなのか 	
時間などその他の条件について	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 安全に計画通りに進めて時間内に終わらせるには 	

このように「問い」を考えさせるという活動を通じて、子どもたち自らが交流会の課題を導き出し、それに向けて何をどう取り組んでいけばいいのかを考えさせるきっかけとなった。この「問い」は、交流会の取り組みの過程で、常に示しながら

取り組んだ。

実践例Ⅱ お客様との会話にチャレンジしよう

お客様との食事中的会話のシミュレーション活動を通じて、コミュニケーションスキルを高める授業を行った。どんな話題がいいのか家庭で考えてきた内容を交流し、班でも話題を話し合った。

そして実際に教師がお客様役を演じ、シミュレーション活動を行った。

○ 授業の流れ

1. 学習課題への接近	(1) 出合いの自己紹介シーンを演じる。	出合いにどのようにお客様と接するのかが前時の復習で行って見る。
2. 学習課題の設定	(2) 学習課題を設定する。 お客様に喜んでいただける会にするにはどんなコミュニケーションをとりたいだろう	お客様に喜んでいただける交流会にするにはどうしたらよいかという問いを確認する。
3. 学習課題の追求 アイデアを出す	(3) 課題「おじいちゃんおばあちゃんとの話題」について発表する。	③ 聞き取りの内容を発表させる。 ・こんな事を意識するといいいよ。 ・こんな話しをするといいいよ。
シミュレーション活動Ⅰ	(4) 班でシミュレーションをする。 ・お客様が座られたところから ・テーブルには料理がある ・自己紹介する ・話題を考える	④ 班で次の点を出させる。 ・態度面でこうするといいいよ。 ・こんな話題がいい。 (留) 人生の先輩であるという視点
シミュレーション活動Ⅱ	(5) お客様役の先生を迎えシミュレーションをする。	⑤ T1~4はお客様役。一つの班でシミュレーションを行う。他の班はその班を評価。その評価内容を交流し、もう一つの班も行う。 (評) ・笑顔で話しているか。 ・班のメンバーのチームワーク ・話題や会話のつなぎ方。
解決アイデアの交流	(6) 全体の場で1~2班が実際にシミュレーションを行ってみる。	⑥ 評価の視点を持って交流させるようにする。
本時のまとめ	(7) シミュレーションで分ったことを発表する。	⑦ 人生の先輩と語る時にどんなことに気づいたら、「来てよかったなあ」と思っていたらいい交流会になるかまとめさせる。 (評) 問いを意識することができたか。
次時への発展	(8) ふり返しを行い、交流会に向けての見直しを持つ。	⑧ 本時の学習をふり返し、相手のためにという気持ちを忘れず取り組んでいこう話す。



図2 お客様との会話にチャレンジ

図2は、教師がお客様役を演じ、実際に会話にチャレンジし、その様子を、他の班が評価している場面である。実際に本番をイメージしやすいように、テーブルセンターや料理の写真なども置いて行った。予想以上に緊張して思うように話せない自分を感じる生徒が多かった。

自分が行ってみるだけでなく、他の班の会話の様子を客観的に評価したので、その様子から話す

時に相手の目を見て笑顔で話すことや、一人が話している時に、周囲の人もその話をよく聞いて、みんなで話をつなげていくといいことなどに気付くことができた。

実践例Ⅲ 招待状・ウエルカムボードを作ろう

班全員が協同的に作業できるように、紺色の台紙に一人ひとりが作った飾りやメッセージを貼る形をとった。班でこのようなものを作成する場合はとかく誰かにまかせがちになるが、班全員の気持ちを表現することを条件に工夫させるようにした。この場面でも、「お客様が喜んで下さる交流会にするにはどうしたらよいか」という「問い」を投げかけながら取り組んだ。図3のようなものが完成した。

実践例Ⅳ お客様に電話をかけよう

子どもたちは、日常生活の中で目上の方に電話をかけるという経験はない生徒がほとんどである。また携帯電話も普及し、家庭でも電話に出て取り次ぐという経験すら減ってきている。その中で、お客様に電話をする活動は、目上の方とのコミュニケーションや電話をかけるときのマナーの学習にもなる。また何より、お客様に自分達の気持ちをどう伝えるかという心情面を耕すことができると考えた。子どもたちにはマニュアルを示さず、どう話したらいいか相手の反応を想定しながら、会話を文章にしてみるという事前準備をして電話をかけさせた。



図3 お客様への招待状と電話をかける場面

(2) 家庭科の時間の取り組み

「地域の高齢の方との交流会」概要は、家庭科で4月から学んだ食品に関する知識を生かし、4人1組で栄養バランスのとれた献立を一人一品班で合計4品考え、その料理を地域のお客様と一緒に



図4 献立についての話し合い

に食べながら交流を深めるというものである。そのために、冬休み前には、班で献立案1を考える。そして、冬休みに一人ひとりが各家庭で試し作りを行ってみる。自分の担当メニューを作ってみることは必修課題とし、班のメニューについては自主的に取り組むように話した。たいてい班に一人は、家族にも協力していただいて（保護者の方にも通信等で活動内容を発信していく）4品全部を作ってみたという生徒もいた。

冬休み明けには、その家庭での実践レポートを持ち寄り、献立案2を考える。そして、家庭科の時間に試し作りを行う。お客様として、中学校の教師が試食し、味・盛り付け・調理の方法・栄養バランス・量などの点で高齢の方が食べられるとしたらという点で評価した。生徒は、その評価を参考に自分達で改善点を見つけて、献立を最終決定した。



図5 試しつくりの場面と完成した料理

(3) 道徳の時間の取り組み

試し作りは、時間オーバーしたが全員が一生懸命に取り組んだ。しかし、子どもたちの気持ちは料理を作ることに一生懸命になり、料理が成功したらこの交流会は成功するような気持ちになってしまう生徒もいる。そこで、次のような資料を読み、高齢の方の心情を考える授業を取り入れた。

資料1 寄せ集めのぜんざい（手紙）

心のこもったぜんざいのおいしかったこと……。この味が忘れられません。それから、首飾りを作って待っていてくださった〇〇さん、ありがとう。それから、〇〇くん、〇〇さん。悲しいことにおぜんざいを作ってくださった方々の名前を忘れ出しました。ごめん下さい。（略）あの時間楽しかったけど、あつという間に時間が過ぎて。見送っていただいたとき、どこまでもさよならして。あの時、うれしくて悲しくて……。自宅に戻ってもらったのですが、涙・涙……。泣いてしわくちゃの顔がくちゃくちゃ。うれし涙でさよならがいえないほど……。

最後になりましたが、早くこのうれしさを書きたかったけど、歳のせいかちょっと調子をくずして書けませんでした。今は元気になりました。ご安心下さい。日々寒さがますますから、通学に、勉強に大変と思いますが、どうぞお体大切に。読みにくくごめん下さい。

生徒の感想より

・お客様の手紙を読んで、私も喜んでもらえるようがんばろうと思った。味も大切だけど心のこもった行動が心に残ると思った。お客様は私達の事ちゃんと見て下さるんだな。自分の事だけでなく周りをちゃんと見て行動したい。

・今まで時間内においしいものを作りたいと思っていたが、それより心をこめる事が大事だ。心配りや気持ちはお客様に伝わると思う。班目標の「心をこめて作る」をがんばる。料理が失敗しても心が入っていればいいと思う。寄せ集めぜんざいは心がこもっていたから、涙を流されたんだ。

6. 生徒の意識調査より

平成19年から実施の『全国学力学習状況調査』の全国結果で、総合的な学習の時間に学んだ内容に関する有用感・実用志向的な動機付け、つまり「普段の生活や社会に出た時役に立つと思うか」について肯定的にとらえている子どもは6割程度で、これは国語や数学などよりも低いという結果を目にした⁹⁾。このことから、将来への見通しを持ち学習課題に現実感を持たせ、学ぶ喜びを感じられる総合的な学習の時間にすることが課題で

あると考えた。そこで、本校の生徒の総合的な学習の時間に関する意識を知り、今後の題材開発に生かしたいと考え次の調査を行った。対象生徒は本校7年生82名である。

- ① 学んだことは、普段の生活や社会に出た時役に立つと思うか。（図6）
- ② 印象に残っている内容は何か。（図7）
- ③ 学んだことを、生活の中や他の場面で意識することがあるか。（図8）
- ④ どんな力が身についたと思うか。（図9）

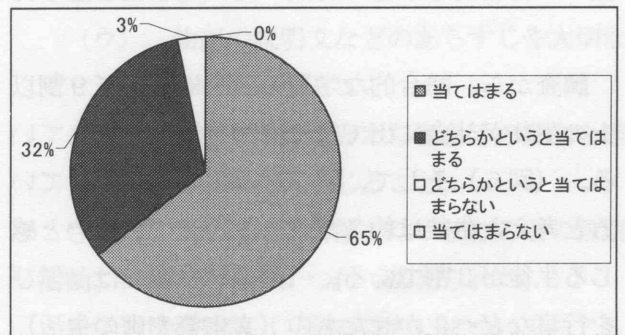


図6 生活や社会に出た時役に立つか

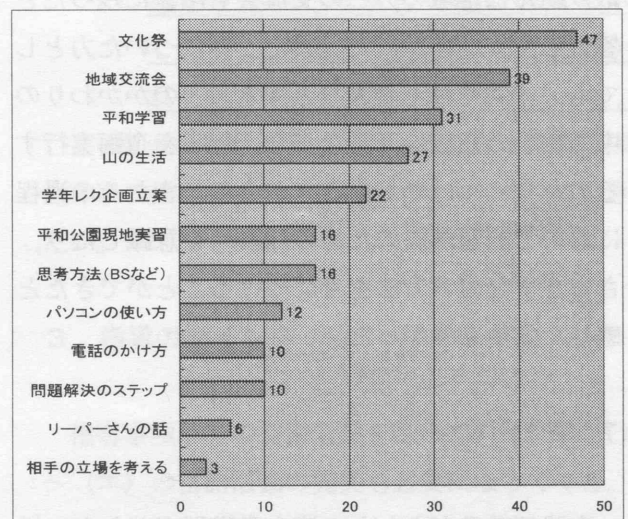


図7 印象に残る学習内容

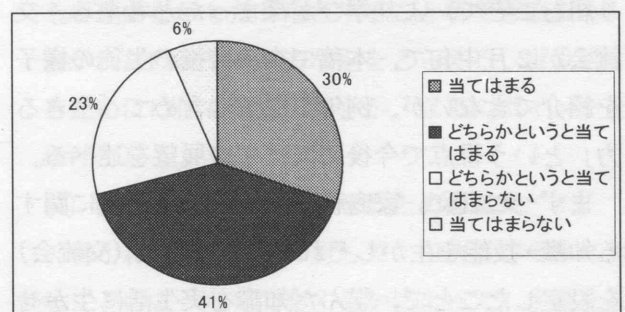


図8 生活の中でつながっていると感じたこと

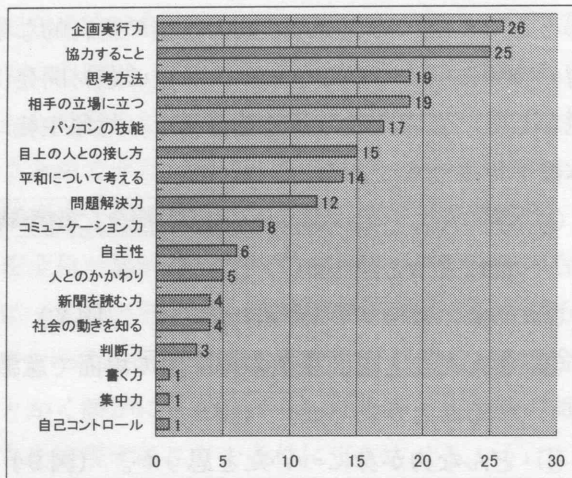


図9 総合的な学習の時間に身についたと思う力

調査から、総合的な学習の時間について9割以上の生徒が社会に出て役に立つ学習だと考えている。(図5)そして、学びを実生活に生かしていると考えた生徒は約7割で、生かしていないと感じる生徒が3割である。(図8)内容では、学びを行事などへ生かしたもの(文化祭や山の生活)が印象に残っており、家庭科との総合単元として取り組んだ地域の方との交流会も印象に残ったと答える生徒が多かった。また、身についた力としても、仲間や目上の人など人と人とかかわりの中で相手の立場を考えながら、物事を企画実行する力を身につけたと言う声が多く、またその過程において問題解決のための「問い」を意識したり、さまざまな思考方法を身につけることができたと感じた生徒も多かった。

7. おわりに

実践例の子どもたちの姿や意識調査からも、総合的な学習の時間や道徳を家庭科と関連付けて取り組むことで、より学びが深まったと考える。交流会が2月中旬で、本稿で交流会後の生徒の様子を紹介できないが、例年の様子も含めて「生きる力」という視点で今後に向けての展望を述べる。

まず一つ目に、家庭科で身に付けた栄養に関する知識・技能を生かしそれを発揮する場(交流会)を設定したことで、学んだ知識を実生活に生かせるという実感を伴った経験ができています。これは

家庭科で身に付けた知識や技能をより高次で確かなものにし「生きる力」を育むことにつながる。

二つ目に、家庭科では幼児・高齢者など他者とかかわる力を重視している。しかし現行の授業時数では、生徒が試行錯誤し、人とかかわりの中で学びを深化させていくことができない。やはり総合的な学習の時間・道徳の時間を家庭科と関連付け、問題解決の方法や考え方を学び、相手の心情に触れる活動を行うことで、それが「生きる力」につながっている。今後の社会を他者と豊かにかわりながら生きていくために必要な力は、このように横断的・総合的な学びの中で「誰かのために他者と協同し、知識や技能を生かし、相手の喜びが自分の喜びにつながる経験」を積み重ねていくことだと考える。

三つ目に、家庭科の学びを他の時間とも関連づけると、生徒の価値観や活動に幅が出る。その要因はかかわる教師が多いことである。他者と協同的に豊かにかわる力を育むためには、色々な視点から多面的に子どもたちを指導することは大変効果的である。

以上のことから家庭科と総合的な学習の時間・道徳の時間との関連をはかることで、生徒が教室での学びを他の授業や日常生活、広くは地域社会での生活と結び付けて考えた時、はじめて家庭科で学んだ知識・技術が本物の生きる力「生活実践力」として身につくと感じている。

〈参考および引用文献〉

- 1) 佐藤文子編著：「中学校新学習指導要領の展開 技術・家庭科家庭分野編」, 2009, 明治図書.
- 2) 文部科学省：「中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間」, 2009.7, 教育出版.
- 3) 文部科学省：「中学校学習指導要領解説技術・家庭科編」, 2009.7, 教育図書.
- 4) NPO法人日本未来問題解決プログラム：高橋りう司編「問題解決力がぐんぐん伸びる!」, 2009, 合同出版.
- 5) 文部科学省：「今、求められる力を高める総合的な学習時間の展開」, 2010.11.